



新年度を迎えて

大学の研究室といえば、新たに配属された学生さんたちを迎えて、新しい研究テーマを始めることも多い時期ではないでしょうか。特に修士課程で修了される大学院生さんは、修士課程2年間の途中でかなりの時間を就職活動に充てる場合もあり、本当に限られた時間の中で実験を行わなければならない、何とか結果を出して最終的にどこかの学術誌に論文として投稿できるまでに至ることはかなり難しい。それでも何とかある程度まとまった形になり、いざどこの学術誌に投稿しようかと考えたときに、私は最近の学術雑誌の乱立に少し戸惑うことがある。私の専門は細胞生物学ですが、例えば *Journal of Cell Science* や *Journal of Biological Chemistry* など、以前からある学術誌についてはこれまでも何回か投稿しているし、実際に我々の論文が掲載されるに至ったこともあり、このくらいの研究成果だと通りそうかなあ、と何となくわかっているつもりである（それでも reject の通知をもらうことがよくあるが）。もちろんトップジャーナルは今でも大変すばらしい論文が数多く存在し、やはり投稿する側もアクセプトをもらうためにはインパクトのある結果と、それに伴う多大な労力を要することは言うまでもない。ところが、昨今の *PLOS* 誌などに代表されるオープンアクセス誌は、どの程度の内容でその雑誌に投稿するべきか、未だにきちんと理解できておらず戸惑ってしまう。その上、よく似た名前の学術誌も多く存在し、例えば“Cancer”などの広く使われる word を PubMed で検索すると、見たこともないような雑誌名がしばしば見受けられる（私が無知なだけかもしれませんが……）。また、私の所に知らない学術誌から投稿を催促するような内容のメールが届くこともある。

以前は、どこの学術誌に投稿するか判断する基準の一つとして、しばしばインパクトファクターの数字を参考にし

ていた。今ほど雑誌数が多くなかった頃は、インパクトファクターの数字からその雑誌に掲載されている論文内容のレベルがおおよそ判断できていたように記憶している（すべての論文に当てはまるわけではないが）。ところが、トップジャーナルはさておき、最近の各雑誌に対するインパクトファクターの数字については、以前ほどその雑誌の難易度を表す数字とは言い切れない部分もあるように思える。特に、先ほど述べたオープンアクセス誌には同じような数字のインパクトファクターを持つ雑誌が幾つか存在し、今ではその数字を頼りに投稿先を決めることはかなり難しい。とはいうものの、私がオープンアクセス誌への投稿をためらう最大の要因は、首尾良く論文が通ったあとで要求される掲載料の高さなのかもしれない。特に、最近のトップジャーナルの出版社が出しているオープンアクセス誌 (*Nature Communications* や *Cell Reports* など) は、論文を掲載するために膨大な金額が必要で、研究費にそこそこ余裕がないと投稿できない学術誌となっている。従って、我々のような細々とやっている小さな研究室ではとても投稿できそうになく（もちろんそれなりの研究成果が出ればの話であるが）、たまにこのような学術誌に掲載されている論文を見つけると、この研究室は研究費が潤沢なのだろうなど、少し思ってしまう。

いずれにしても、どこに投稿するべきかで最も大事なことは、我々の研究成果に対して興味を持って頂ける方々にきちんと読んでもらえる学術誌であるかどうかである。ただ少しだけ欲を言えば、研究費を獲得するための申請書に書く研究業績の欄には、やはり審査される方の目にとまるような学術誌の名前がないとなかなか研究費が取れない現実があり、従ってできる限りレベルの高い学術誌に論文が掲載されるよう努力をすることになる。このときに、最近のオープンアクセス誌はどの程度の評価がされているのか、そこは審査される方によってかなり違うのかもしれない。これまでいろいろと述べてきたものの、結局のところはきちんとした研究成果が出ないと論文の投稿すらできないわけで、論文をどこに投稿するか迷うことに時間を費やすより、やはり日々の研究の積み重ねに貴重な時間を使う方が大切であることは言うまでもない。

(惑う四十)